

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

お嬢様パティシエ

桜葉ユリカ

白濁のデコレーション

冬野ひつじ

表紙 / 草上明

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『お嬢様パティシエ桜葉ユリカ 白濁のデコレーション』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



お嬢様パティシエ
桜葉ユリカ
白濁のデコレーション

冬野ひつじ
表紙 / 草上明

登場人物紹介

Characters

さくらば

桜葉ユリカ

美貌のパティシエとして母から引き継いだ製菓学校の理事長を務める。父の死によって学校に多額の負債があることが判明し、当惑する。

こばやかわすずな

小早川鈴奈

ユリカの専属アシスタント。少し不思議な雰囲気を持つ子で、先日からしばらく姿を見せなかった。

午前二時。

束の間の眠りに沈んでいる都心の一角。下弦の月の光を浴びてほの白く輝く真新しいビルの窓辺を、小柄な人影がよぎった。

コツコツコツ……とヒールの音を響かせて向かう廊下の突き当たりには『製菓実習室』というブロンズのプレートがかけられた両開きのドア。重々しい音を立ててドアが開けられると、調理台が整然と並ぶ広い実習室は月明かりに青く染まり、まるでプールの底のような静けさに満ちている。

明かりもつけずに入って来たのは、黒いワンピースに純白のドレスエプロンを着けた少女だ。ハイティーンかそれより少し上、という年齢だが、調理台の間を脇目も振らず一直線に歩くその姿には、並みの大人が及ばないような威厳すら漂っていた。

黒い幅広のカチューシャで留めたセミロングの髪は深みのある亜麻色で、切れ長の深緑色の瞳と共に西洋の血が入っている事を示している。肌理細かな白い肌と相まって、まるで命を得たビスクドールのような美しさだ。ただ、講師用のひととき大きな調理台の前で立ち止まったその少女の唇は、酷く蒼褪めていた。

(……………なんて、寒いの)

スタジオと呼ばれているこの製菓実習室では温度変化に敏感なチョコレートなどを扱うため、常に室温を低めに設定してある。だが、身震いしてしまったのは単なる空気の冷た

さのせいだけではない。

(この学校はもう……私のもではなくなってしまった)

アンバーブラウンの細い眉をキュツと顰め、殺風景な深夜のスタジオを見渡す。

ほんの二週間前まで華やいだ活気に満ちていたこの場所は、今は心の芯まで凍えるような空気で満ちていた。

「ここに立てるのも、今夜が最後かもね」

愛用の調理台に手を当てて、少女はぼつりと呟く。

(まだ信じられない……私とママの、夢の結晶のこの場所が……売り飛ばされてしまうなんて……信じたくない……っ！)

一点の曇りもないステンレスは氷のように冷たくて――。

ふいに涙が滲み、少女は糊のきいたエプロンの裾を強く握り締めた。

『パティスリー・ユリカ』

この製菓学校の名前を一躍広めたのは、僅か二十歳で理事長に就任した美貌のパティシエ、桜葉ユリカさくらばの存在だった。

ケーキシヨップ兼製菓学校のオーナーだった母から製菓の基本を叩き込まれたユリカは、高校卒業後はごく自然に母の故郷ウィーンへの留学を選択する。だが、最初の帰国を目前

にした冬のある日、最愛の母は交通事故で亡くなった。

シヨップは休業せざるを得なかった。カリスマ講師を失った生徒達は櫛の歯が抜けるように一人また一人と去り、教室に明かりが灯る夜はほとんどなくなる。そんな状況を前に途方に暮れる娘に、教材用DVDの企画を持ち込んで来たのは、父であり実業家でもある桜葉洋介よすぎだった。

発売前から流れた「美少女すぎる」などという評判に多くの男性客が飛びつき、DVDは瞬時に完売した。続く第二弾第三弾もすぐに品切れし、『期待の美少女パティシエ桜葉ユリカ』の存在はたちまちマスコミに取り上げられた。おかげで生徒数は急増し、手狭になったシヨップを売った洋介はデザイナーズビルの校舎を建ててユリカを強引に理事長に就任させたのだった。

（新たなカリスマ、なんて言われても私の実力が評価されている訳じゃないのに……）
時にはやつかみ半分の酷評もあったが、それでも学校のためと父親に懇願されれば取材も断る訳にはいかない。

（だけど私はこのままじゃ終わらない！ ママを超えて、世界で通用するパティシエにならなくちゃ……！）

揺るぎない想いを秘めて、ユリカはこの調理台を使って日中は実習に夜はレシピと試作品作りに没頭した。ケーキを作っている時だけは嫌な事も忘れられた。うら若きパティシ

エにとつてスタジオとは生活の一部であり、身体の一部ですらあった。

——二週間前に洋介が亡くなり、残された巨額の負債が明らかになったその日までは。

父の経営していた会社も家も別荘も、そして学校も、気が付けば財産は全てが怪しげな投資会社の手へ渡っていた。

『貴女とは一度直接お会いして、ぜひとも直にその美貌を……と、まあ、実のところは部下が非常に楽しみにしておりますね』

社長の鷺塚わしづかと名乗る男からの電話があつたのは二日前の深夜だった。

『だいたいの流れはDVDの撮影時と同じだと思つてもらえばいいでしょう。我々の前でデコレーションケーキを完成させる事ができたなら、学校は引き続き貴女に全てお任せします……悪い話ではないと思ひますがね』

人を見下した口調に生理的な嫌悪感を抱かされたものの、鷺塚の提案はユリカに一条の光を与えた。

（目の前でケーキを作らせてそれを撮るだけ……本当にそんな事で私の理事長としての適性を判断できるとは思えないけど……）

とはいえ具体的な経営や管理をあまり把握していなかつたユリカにとって、鷺塚の話は唯一にして最大のチャンスだ。むぎむぎ断るのはためらわれた。

「……とりあえず、良かった……のかしら」

とつくに切れている電話の前で、少女理事長は気の重さと安堵の入り混じった息をつく。
(ただ、困るのはアシスタントよね……連れて来るって言うけど、互いの呼吸が合わない
と、技術があっても使い物にならないし)

専属アシスタントを務めていた小早川鈴奈こばやかわすずなは、洋介の葬儀の晩に突然失踪し、いまだに
行方は全く掴めていない。

普段は腰までの茶髪に、ゴスロリ服という不思議系少女だが、アシスタントは的確で、何
よりも、実は人付きあいの得意ではないユリカにとっては心許せる大切な友人でもあった。
最近では一人暮らしの彼女を自分のマンションに招いて、料理を作り夜遅くまで他愛もな
い話をするのが密かな楽しみにもなっていた。

(やっぱり何かがおかしい……よく分からないけど、確かあの会社……ヤクザが関係して
いるって噂も……)

結局は鷲塚の提案を呑んだものの、形容しがたい不安はずっと付きまとって離れない。

『私も期待していますよ……フフッ、先生はDVDなんかで見るよりもずっとお綺麗なん
でしようねえ』

受話器の向こうの虫酸が走るような含み笑いをふいに思い出し、胃がせり上がりそうに

なる。

(ダメ……落ち着きなさいユリカ……!)

ネガティブになる一方の気分を振り払おうと頭を振ると、ふいに甘くほろ苦いほのかな芳香を鼻先に感じた。

(あ、これ……グアナラの香りだわ)

知らず知らずのうちに、美人講師の口元は僅かに綻ぶ。数百はあるチョコレートブランド名と銘柄の全てを嗅ぎ分けられるという特技は、パティシエとしてのユリカの自慢の一つだった。

(そういえば、新作に使うために買って冷蔵庫に入れたままだった……)

次の品評会ではこれを使ったケーキを発表するつもりだったのだ。これまでにない完全なオリジナルのレシピとデコレーションは自分の技術を最大限に生かしたものはずだった。それを思い出した途端、華奢な背筋がグツと伸びる。

(そうよ、私にはやるべき事がまだ沢山ある。そのために知識も技術も磨いて来たんだから……ケーキ作りも、この学校の将来も……こんな時だからこそ、私がなんとかして切り抜けないと……!!)

そう自分を叱咤した時、背後でドアの開く音がした。

「……ユリカ先生、お久しぶりですう」

照明のスイッチを押して入って来た小柄な人影に、ユリカは驚きを隠せなかった。

「す、鈴奈ちゃんっ!？」

とっさに駆け寄ろうとしたが、次の瞬間、愛弟子の雰囲気のあまりの異質さにユリカは反射的に両手を口元に当てる。

(違う! 何かおかしい……!?)

三人の男達に囲まれて、にへらと笑うその姿には鳥肌が立つような違和感があった。

高めに結ったシニヨンに講師用の赤いエプロンは見慣れたいつもの格好だが、チャームポイントだったはずの黒々とした大きな瞳は、とろんとして光が全くない。

男達の雰囲気も異様だった。高価そうなストライプのスーツを着た三十代後半の男が驚塚だろう。その横にボディガード風の若い男。サングラスをかけてスキンヘッドという容貌もさることながら、褐色の肌にも二メートル近い身長は格闘技の選手のように威圧的だ。撮影機材を抱えた垢じみた開襟シャツ姿の中年男はカメラマンなのだろうが、彼らの誰一人として堅気の人間には見えない。

「これはこれは桜葉先生、こんな時間にご無理をさせてしまい本当に申し訳ありません」
驚塚の慇懃な挨拶も動揺するユリカの耳には入らなかった。

(鈴奈ちゃん……まさか今までずっとこの男達と一緒に……?)

鷲塚以外の男達は挨拶すらせずに目の前の美少女を舐めるように見回している。特に胸の辺りに気味の悪い視線が絡みついて来るような気がして、エリカはおずおずと腕を組み、フリルの間で強調された豊かな盛り上がりをなんとか隠そうとした。

(……この人達……何なの……?)

父親の仕事先にはよく連れ出されていたし、家にも多くの使用人がいたせいで昔から年上の人間達を相手にする事自体は慣れているつもりだったが、今は情けないほどに足が竦んでいる。視姦、という言葉は幼稚園から大学まで一貫教育のお嬢様学校で育った少女の語彙にはないが、自分の身体を性欲の対象として見られている事は本能的に感じ取れた。

それでもなお怯えを見せまいと堪える少女に、鷲塚は手にした物を無言で掲げてみせる。

「……っ!!」

(スタジオの鍵!!)

上げかけた悲鳴は、咽喉に引つかかっただま出では来なかった。

(警察に電話を……だめ、携帯はロッカーの中に置いてきたんだわ……!)

舌の付け根が震える感覚というものをユリカは生まれて初めて味わう。鷲塚が近寄って来ても、震えに感づかれないようにするのがやっとだった。

「桜葉先生、準備はよろしいですか？」

物腰はあくまでも柔らかいが、男の目には生まれたてのヒヨコを前にした蛇のような、

圧倒的な強者のみが浮かべられる残忍な色が見て取れる。

「……あ……あなたっ、こんな卑怯な方法でこの学校を……私の学校を手に入れるつもりなの……っ!？」

なんとか押し出した声は、自分でも驚くほどに悲痛だ。

「これがビジネスですって？　まるで……ヤクザじゃないのっ！」

眼前の緊迫したやり取りにも全く笑顔を崩さない鈴奈と、ドアを塞ぐようにして立っている男達。世事に疎いと自任しているユリカにも、この男の纏っている底知れぬ不気味さと恐ろしさは十二分に感じ取る事はできる。

「理解していただければ話が早い。これこそが私のビジネスなんですよ……貴女の知らない裏社会の、ね」

百戦錬磨のハゲタカが芝居がかった様子で両手を広げるのを見て、少女の強気はぐらりと揺らぐ。それでも男を睨めつけ、量感的な唇をぐつと噛み締める。

(……だったら……だったら、なおさらここで私が引き下がる訳にはいかない……!)

本来であれば交わる事をためらうような闇の世界の住人。だが、大切なものをみすみす奪われるのは、彼女のプライドが許さない。

恐怖を押しつけるほどの強い憤りが孤立無援の少女を支えていた。

「……いいでしょう、私も理事長です。あなた方のような得体の知れない会社にみすみす

経営をお渡しするつもりはありません」

精一杯の怒りを込めて言うのと、

「なら、さっそくテストを始めましょうか」

しれっとした声で鷺塚が催促する。

「ええ、望むところですわ……！」

その言葉に、男の目が三日月型に細められた。

「いやあ、ありがたい……やはり今日お会いして正解でしたよ」

名目だけの理事長とはいえ、経営の乗っ取りなどというこんな恐ろしい事態は二週間前の時点では想定すらしていなかった。そんな自分に感じた幾分の後ろめたさが、あるいは可憐な少女に狡猾な畏へ足を踏み入れる事を決断させたのかもしれない。

「ああ、これはお預かりしておきましょう」

鷺塚は薄笑いを浮かべたまま鍵を胸ポケットにゆつくりと収める。

（学校も鈴奈ちゃんも、こんな奴の好きにはさせない！ だから、しっかりするのよ!!）

ユリカは気付かれないように拳を握り、深呼吸した。

「……お菓子の材料は、必ずグラム単位まで正確に計って下さい」

廻り始めたカメラの前でユリカは計量についての説明に入っていた。広い調理台の上に

は重ねたボールや山盛りのフルーツが、カメラのフレームに収まりきるよう鈴奈の手によって巧みにディスプレイされている。

(余計な事は考えないで、集中しないと)

「レシピは、何度も研究を重ねて作られています……ですからレシピ通りに作業を行えば、お菓子作りは決して難しくありません」

何百回も繰り返して来た台詞がすらすらと出て来てくれるのは、せめてもの救いだ。

「もちろん、愛情を込めることも大切です」

ユリカは最上級の笑顔を作った。

「愛情を込めればその作品は世界に一つしかない素晴らしいものに……っ!!」

背後にスキンヘッドの男が廻り込んだのに気付いた次の瞬間、美貌の講師は息を呑む。

「……っ!!」

(やっ……どこ触ってるのよっ!!)

疼痛と、それに混ざって久しく感じていなかった種類の甘美な電流が少女の頬を一瞬で桜色に染め上げた。ドレスエプロンの上から両の乳房を揉まれたのだ。

「やめて下さいっ!!」

なんとか抑えたものの怒気を隠せない声でユリカは男に抗議する。

「騒いでいいのかな? カメラ廻ってるぜ、さっさと続けなよ」

(やっ、押しつけないでよぉ……………!)

陰毛の茂みが睫毛や髪に触りユリカは顔を顰めるが、男はさっきの不気味さが嘘のよう
な上機嫌さで声を上げる。

「んはぁ、マジでチンポ溶けそ……………って、危ねえ、こん中で出しちまいそうだ……………」
その言葉に、ユリカの鼓動が大きく打った。

(私の口……………そんなに気持ちイイの……………?)

鈴奈の超絶技巧で一度は極限まで高められた官能が、柔肉の奥で妖しく蠢く。

(本当……………さっきより大きくなってる……………)

驚きで目を瞬かせながら、男の腰に両手を当て、さらに深く咽喉奥まで牡棹を飲み込む。
(こんな太くなつて……………ンツ、また先から苦いお汁が出たぁ……………)

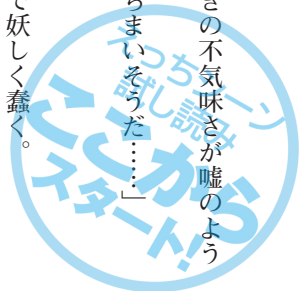
エグ味に眉根を寄せながらも、嫌悪は薄れていた。代わりに、初めてのオーラルセック
スという背徳感とそれに触発された疼きが身体中を蝕む。

(こんなヤツのモノをしゃぶらされてるのに……………臭いのに……………止まらないっ……………!)

(こんなヤツの……………なの……………っ!)

ごまかしきれないほどに強い情欲の炎が、美少女講師の理性を炙り溶かしていく。

「……………んはぁツ……………ブチュツ……………ジュルルツ……………!」



膝を屈して奉仕に没頭する裸エプロンの少女。その耳に男が囁く。

「ほら、本当はこのチンポで思いきりイきたいんだろ……奥まで突いて欲しくて堪らないんだろ……？」

ねっとり、鼓膜を侵すような粘性の囁きに、ユリカの頭でついに何か弾けた。

（もう、我慢できない……欲しい……コレが欲しい……っ！）

そう思った途端、肉棒を口から突然引き抜かれる。

「そんな顔しなくても大丈夫だよセンセイ。今、ちゃんとマ○コにハメてやるから」

口を半開きにしたまま、物欲しげな表情を取り繕うのも忘れて男を見上げる元社長令嬢は、この時既に逃れられない凌辱の網に絡め取られていたのだった。

「へへッ、俺のはカリ高だから、最初がちよつと辛いかな」

男がいそいそと仰向けになると、クイーンサイズのベッドほどもある調理台が急に小さく見えた。

「早く来いよセンセイ……跨がって自分で入れるんだ」

（……そんな、自分で入れるなんて……）

天井に向かって屹立する肉槍に、膝立ちになつて嫌々ながらもおとなしくにじり寄る。

「エプロンは持ち上げてろ。自分から股広げてチンポをハメハメするシーンをちゃんと撮

つてもらわないといけないからな」

「わ……分かったわよ」

両手で裾を掴み、胸の下まで持ち上げる。

「……これでいいんでしょ……？」

自分の淫らな格好が男達の目に晒されているのだと思うと、気を失いそうになる。

（私がこんなエッチなビデオの女の子達みたいなのは真似をするなんて……嘘みたい……）

それでも身体の疼きにはもう逆らえない。屈辱に歯を喰いしぼり、褐色の身体の上に跨がる。グロテスクな男根はすぐその真下だ。硬く目をつぶり、レンズからなるべく顔を逸らす。

（なんで私、こんな男の言いなりに……これじゃ、まるで本当に自分から欲しがってるみたいに撮られちゃう……）

挿入を願ったのは自分だというのに、ここまで来てまだ溶け残ったプライドがユリカの動きを緩慢にさせる。剥き出しの秘部をなんとか亀頭に当てたものの、それ以上身体が動かない。

「ほら、さっさと突っ込むんだよっ!!」

待ちきれなくなったのか、いきなり男はユリカの細い腰を両手で掴み、グイとそのままペニスの上に垂直に落とす。

「あつ、あああうっ!!」

ズツチユウウ……ツ!!

キルシユと苺の果汁と自分の淫蜜で十分すぎるほど潤っていた肉壺。そこに垂直に男根が突き刺さり、ループしていた思考を吹き飛ばした。

(ふっ、太いつ!!)

想像したよりも遥かに強い衝撃に可憐な顔が苦悶に歪み、ぐいと仰け反ったはずみで艶やかな髪が躍った。

「ひあうっ……!!」

それでも牡の生殖器にたちまち反応して、牝穴は熱い淫蜜を噴き出し、インサートをスムーズにしようと結合部分を濡らし始める。

(ああっんっ! 男の人のおちんちんっ、私の中に入ってるうっ!)

「あつ、はうんっ、くふううっ!」

忘れかけていた男性器の硬度と圧迫感に息が詰まるが、非情な肉棒は柔らかな牝肉を切り裂くように侵犯していく。

「なんだ、ビビった声出してる割にはいきなり奥まで啜え込みやがって……もうマ○コぬるぬるじゃねえかよっ!!」

「ちがっ、これはさつききの苺があ……ああっ! 動かさないでえっ!!」

平均以上の太さのペニスを根元まで入れられ、膣口は無残に広がっていた。痙攣する秘唇とクリトリスが痛々しいまでに赤く色付いている。

「俺もっ、センセイのファンなんだ……本当だぞ？　いつかこうして……ハアツ、俺のチンポでイキ狂うまで突きまくってやりたいと思つてたんだぜっ？」

「な、何よそれっ、ふざけないで……あつ、ひやううっ!!」

眉間の皺を消そうとしないユリカを騎乗位の体勢で貫いたまま、腰を動かし始める男。やつと手に入れた獲物の味を確かめようとしているのか、深く浅く、様々な角度でペニスを動かす。

「あああッ、だからっ、動かしちゃ……ッ、らめっ……!!」

そのたびに、ぺたりとした柔らかそうな下腹部が微かに盛り上がる。

「はっ、はうっ……ン、はあッンッ!!」

抽送の勢いはどんどん増していき、少女は嬌声を上げながら腰をバウンドさせ始めている。

（こんなっ……こんなゲスに遊ばれてるのにつ、私の身体っ、勝手にキモチよくっ……!!）
張りのある乳房がエプロンの胸当て部分から完全にはみ出し、タブタブと上下する。

「やっぱり母親がパツキンだとマ○コの具合も違うなよあ、ハーフ最高っ！　はあつ、マシユマロおっぱいも最高だっ!!」

「いやっ、ひあああん!!」

毬のように弾む両乳房に太い指をブスリと喰い込ませ、疼痛と快感が同時に衰れな少女を襲う。

「何だよっ？ 嫌ならそんなサカった声で鳴くんじゃねえっ！」

加虐心に火が付いたのか、乳房を揉む男の手にさらに力が加えられた。

「人前でオナニーしてイク牝犬は、おとなしくチンポで感じてればいいんだよっ！」

「め、牝犬なんかじゃ、はうううっん！」

どれだけ否定しようにも、自分の口から出るのは艶めかしい喘ぎだ。

（こんな男に犯されてるのに……レイプされてるのにつ、どうして私の口からっ、こんないやらしい声出てるのよお……っ!!）

「まだ意地張ってるのか？ ぐちよぐちよマ○コが丸見えだっというのによ？」

だが、恥ずかしくてもエプロンを持ったままの手では結合部を隠す事も許されない。それどころか、気が付けば怒張した男根を少しでも奥に導こうと自分から積極的に腰をうねらせていた。

（ふあっ、奥っ、おちんちんが奥にまでゴリゴリ来てっ……腰が勝手に動くのお！）

快感の波に没入してさらに激しく蠢き始めた膣壁の吸いつきで、男の鼻息も荒くなる。

「ふおっ、すごい吸いつきやがるっ！」

「ンッ、それはっ、そっちが動くからっ、ひ、はあ……っ!!」

もはやコントロール不能の淫熱に浮かされて、ユリカは一層息を弾ませる。

「ひいっ、もう、もうらめ!」

（おちんちんイイ……っ、キモチいいっ!）

猛々しい感触を少しも漏らさず味わい尽くしたいと浅ましく勃起ペニスに絡みつく無数の壁に、ひっきりなしに溢れ出る牝蜜。無残に揉み潰されている巨乳も、今は下半身の圧倒的な快感に染まったかのように、熱い疼きを訴え続けていた。

「はあっ、はうんっ……はあんっ!」

（このままじゃ……おちんちんで頭狂わされちゃうっ!!）

だが、そんな戦慄に震えながらも、少女の身体は男の上で跳ね、白濁した濃い愛液を結合部で撒き散らしてしまう。

（な、何この白いのっ?! 精液っ?!）

初めて目にする自分の粘液の変化に、射精されてしまったのかと焦るが、抽送を止めないペニスは硬さを全く変えてはいない。熱い粘液は自分の膣奥からドロドロと絶え間なく溢れ出ているモノだった。

「あはあっ、センチはレイプで本気汁なんか垂れ流して本物の牝犬だなあ？ 俺のケツまで垂らしちゃうって……ファンが見たら幻滅しちゃうよお？」

腹上の少女の戸惑いに気付いた男が、鬼の首でも取ったかのように得意げに嗤う。

（ほ、本気汁っ!! これがっ!! 私っ、レイプで本当に感じてるのっ!!）

本気汁、という卑猥な響きと、それが自分の性器から出ているという事実に関頭の中が掻き混ぜられ、腰をなおさら艶めかしくくねらせてしまう元令嬢。

「ああっ、また腰くねらせやがっつっ! そんなに俺のザーメン欲しいのかよっ?」

「イヤっ、そんな事言わないでえ……ン!」

罵声を浴びたというのに、また新たな蜜が噴き出してしまふ。

（ああっ、ダメっ、私のアソコっ、おちんちんキュウツつて締めつけてるう!!）

いけないと思えば思うほど、膣壁は肉槍に激しく纏わりつき、キュウキュウと夢中で吸い上げていた。

「あっ、ふはッ、ンはあっ!!」

一度火の付いてしまった受精の衝動はもう止まらない。

「俺のザー汁は特濃だから、この一発で孕んじまうかもなあ?」

「イヤあ、ン! そ、そんなの絶対……嫌あ……ンンッ!!」

こんな交わりで妊娠など望んでいる訳がない、そう言おうと思っても、口から出るの信じられないくらい甘い、自分の喘ぎ。

（妊娠なんて絶対に嫌っ……でも……でも……でもっ……どうして……え? ダメなの分かってる

のにつ……奥に熱いの出してもらっていきたいよお……!!)

正常な思考なら絶対にありえないのに、排卵期の只中にあるユリカの牝本能は子宮への射精を激しく求めていた。

「ほおら、どこに欲しいんだ、センセイ？」

「あつ、はあつ、だからダメって……ハアンツ、あんツ!!」

懸命に拒んでも、受精を期待してじわじわと下がり続ける子宮口を亀頭で執拗にいたぶられ、肉悦の波が理性を攫っていく。

「出すのは……あ、らめえ……っん」

「イヤなら仕方ないなあ」

獣じみた激しい突き上げから一転、ゆつくりとペニスを回転させるようにして蜜壺をいたぶられ、思わずねだり声を漏らすユリカ。

「あ、あうん!？」

ジュチュツ！ と粘つく淫音をことさら大きく立てながら持ち上げて、また落とされる。

「んああああ……んんツ!!」

極太の肉棒が奥まで届き、腰を浮かせられる事でまたずると膣口へ抜け出ていく感覚。まるで杭を打ち込まれるかのように激烈な快感が身体を中心に貫く。

ジュボツ！ ジュボ……ッん!!

「もう一度聞けど、どこにザーメン出して欲しいんだ？」

（こんなヤツの汚い精液なんか欲しく……欲しくないのにつ!!）

ジュボッン！ ジュボボツ!!

（それに今出されたらっ、ンハアツ、赤ちゃんがっ、で……できちゃう……!! でもっ、このまま我慢させられてたら……本当におかしくなるう!）

妊娠するのか、絶頂できないまま気が狂うのか、残酷すぎる選択を迫られて、女体は貫かれたまま悶え泣く。

「いひいッ！ やあッ……ン!!」

（おかしくなって……心臓もたないでっ、止まるううっ！ 死んじやうっ!!）

じらされ続ける牝穴に、極めつけの熱い飛沫を受けた。イきたい。

（イきたい！ イきたいっ!!）

「ひ、あッ……おっ、お願いっ！」

生殖本能が、戻れなくなるという恐怖を凌駕した瞬間だった。

「お願いだからっ、イかせてえ!!」

ジュツ！ ジュツ！ ジュチュツ!!

「あはぁンツ、イイっ、止まらないのおっ！」

抑えきれない衝動に身を委ね、自ら柳腰を振りたくって肉棒を刺激する美しい少女は完

全に肉欲の虜になり果てていた。

「イクっ！ イきたいのっ！ もう言う事聞くからあ……このままイかせてえ!!」

膣内射精の一部始終を撮られるという羞恥も、妊娠の恐怖も、鈴奈を氣遣う思いも、もはやユリカの沸騰しきった頭の中から消し飛んでいた。

（欲しいっ！ 欲しいのっ！ このままっ、ぶっといおちんちんのセーエキを出されてイきたいの……っ!!）

「お願いだから早くっ、早くしてっ!!」

髪を振り乱しながら泣き叫ぶその全身は、淡桃色に染まり、玉のような汗を撒き散らす。「ハアッ、どこに出して欲しいのかちゃんと聞こえるようにっ、ハアッ、お願いしないと、出してやらないぞっ!!」

男も限界に近いのだろう、苦しげな息を吐きながら、それでもまだ焦らすようなスロースペースの抜き差しをやめない。

「はうん、はう、はあっ……して……んっ!」

心臓は坂を駆け上がっている時のように、ばくばくと鳴り続け、少女の意識はほとんど朦朧となっていた。

「……して下さい……ッ!!」

（もうダメっ、心臓止まるっ!!）

「おっ……お願いですっ、ユリカのおマ○コにつ、おマ○コの中につ、精液っ……全部出して下さい……っ!!」

哀願の声を放ち、ユリカはついに屈する。

「よく言ったっ、それじゃ……ハアッ、中出しレイプで……しっかりイクんだっ!」
 渾身の力で突き上げられ、次の瞬間膨れ上がった肉槍が激しく痙攣した。

「出るっ! ちゃんと子宮の奥までっ、ファンの熱いザー汁っ、受け止めるよおっ!!」
 牡の咆哮と共に、開ききつた鈴口から灼熱の奔流が子宮目がけてぶちまけられる。

びゅるっ! びゅるびゅるううっ!!

「ふああんっ、あっ、熱い……ンッ!」

膣の最奥、熱く柔らかな小部屋を襲う白濁の洪水は、そのまま脳髓に最大級の快感電流となつて殺到して来た。

(あああつ、私のアソコにつ、おマ○コの中につ、こんなゲスのっ、熱くて汚い精子……いっばい出されてるっ!!)

牡汁の熱さと凄まじい勢いに、最後の理性が蒸発した。

「あああああああつ!! ふああつ、あつ、あつ……熱い出されてっ……いつ、イクうっ……!!」

牝を孕ませるためだけの白く濁った子種エキスを子宮粘膜に思いきり浴びて、身体を目

いっばい仰け反らせた少女は、おもちゃの人形のように弾む。

「こっ、こんななのっ、絶対ダメ……ダメなのにい……っ！ レイプでいくところ撮られてるうう!!」

凌辱ペニスに串刺しにされたまま、叫び続ける美少女パティシエ。彼女の胎内を叩く濁液の勢いはまだ収まらない。

「ふあっ、中に出されてるう……赤ちゃんできちゃうのにつ、私っ、中に出されていつてるのお……っ!!」

獲物の子宮に一滴残らず注ぎ込むつもりなのか、男は腰をがちりと抑え込んだまま蜜壺に深々と剛直を突き込んだままだ。

(うううっ……どくどくっつて、熱いの止まらないいっ……ッ!!)

許容量を超えた快感に我を忘れた視界には、眩い照明もカメラも入ってはいない。ただ牡の精液を最後まで啜りたいと蠢き続ける膣肉の動きにシンクロするように、半ば開いた口からしどけない喘ぎを漏らし続けているだけだった。

「へへっ、アへ顔晒して……俺のチンポそんなに美味かったか？」

「あ……あう……」

言われて初めて自分の涎が顎まで伝っているのに気付くが、膣内射精の余韻に浸りきっている少女にはもうさほど羞恥も湧かなかった。

「あまり使ってないだけあって、なかなかの絶品マ○コだったぜ、センセイ」

（絶品マ○コなんて……私のアソコっ、そんな下品な名前にされちゃった……）

「ひゃんっ？」

下からズリりと肉棒を抜かれ、台の上に尻もちをつく格好で戻される。残った白濁液がタンポンの糸のように男の剛毛の中へとトロトロ落ちていく。

（ああ……もつたいない……っ）

ついさつきまで嫌悪の対象でしかなかった男の肉棒とその精液が、今は堪らなく愛おしく思える。

「ちゅうっ、んっ……んちゅっ……んッ」

気が付けば、男の股間に顔を伏せてゲル状の白い塊を舌尖で掬い取っていた。

「オイオイ、なんだよ、とんだエロパティシエ様だな」

変わりように男が呆れた声になる。

「んんっ、じゅるっ……ジュパッ……ッ……」

（恥ずかしいっ……でも、恥ずかしいのにすぐく……キモチよくて……こんな臭いのに、おちんちんのミルクって美味しい……）

撮影が始まった頃の気丈な様子とはうって変わって、進んで男の股間に這いつくばり精液を啜る美少女。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>